



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	長谷川雄太郎研究序説：『日語入門』諸本校異に基づいて
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 19, 1-23
Issue Date	2015-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61521
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU19_01.pdf



長谷川雄太郎研究序説

－『日語入門』諸本校異に基づいて－

中 村 重 穂

要 旨

小論は、清末期の日本人教習であった長谷川雄太郎（1865～1904）の日本語教科書『日語入門』の書誌学的分析と考察を目的とするものである。同書は、現在国内に草稿を含む6冊が存在し、うち5冊を校合した結果、506箇所の相違点が見出された。これらの殆どは改行位置の違いであり、その他誤植・誤記、脱字、句読点・符号・傍線・ルビの有無等があるが、文（章）の書き換えはない。

また、現代の文法シラバスの観点から指導項目を考察してみると、学習の初期段階で助詞を核とした構造を与え、その後、関連性のある機能や表現を提示し問答を行うようになっていることから、同書は会話力養成に力点を置くものと考えられた。

その上で、『日語入門』をGDMと関連づける劉（2005）の先行研究を検討し、GDMと結びつけるのは困難であることをGDMの指針に即して結論づけ、『日語入門』の構造的特徴として、content wordとstructure wordの区分と、structure wordの集散的提示の2点を挙げた。

最後に、今後の課題として、未確認の諸本の探索とさらなる書誌学的分析の必要性を述べた。

〔キーワード〕 長谷川雄太郎、『日語入門』、GDM (Graded Direct Method)

1. はじめに

19世紀中期、欧米列強からの不平等条約締結をはじめとする様々な政治的・経済的圧力にさらされていた清朝は、欧米文化を摂取して国力を強化する必要に迫られた。この過程で、「洋務運動」が起り、外国語や近代科学、技術を学ぶための新しい人材育成機関が清国各地に次々に設立された。その後、清朝では日清戦争を契機として日本をモデルに近代化を図ろうと

する意識が生まれてくる。その結果、清国から多数の留学生が渡日したが、他方では、日本から中国に渡って教育に従事した日本人＝日本人教習も少なからずいた。小論で取り上げる長谷川雄太郎もその一人である。小論は、この長谷川雄太郎が編纂した日本語教科書『日語入門』に書誌学的考証を加え、その成立過程や特徴について将来の研究の基礎となる情報を与えることを目的とする。

以下、長谷川雄太郎に関する先行研究を概観し、経歴を紹介した上で、『日語入門』の書誌情報の提示、その分析と考察を行いたい。

2. 先行研究概観

長谷川雄太郎に関する先行研究は少なく、その日本語教育についての研究はさらに僅かである。その中ではまず、池上（1985）、池上（1986）が、長谷川家に伝わる史料の解説に基づいて長谷川の事績を紹介し、その中国（広州）への赴任の経緯が記された『広東赴任仕末』と日記（抄）、書簡を翻刻しており、これらは長谷川研究の先駆的業績と言い得る。

続いて、吉岡（2000：17-19）が『日語入門』を明治期の「語法型教材」＝「日本語が実際に使えるようにするために選択された学習項目を中心に構成された教材」の中の「②語法用例教材」＝「文型的な学習項目が列挙されて、それぞれに用法を示す例があげられている」教材の一つに分類しているが、特にそれ以上の説明は加えていない。

その後、吉岡（2002）は、『日語入門』を含む4種類の明治期語法型教材の文法学習項目を（旧）日本語能力試験3・4級の文法項目と対照することでそれぞれの教材の特徴を明らかにした。その結果、『日語入門』は、「助詞や指示語などのバリエーションに特徴がある」〔吉岡（2002：145）〕教材と判定されている。その上で、吉岡は、現代の文型中心の日本語教材の「文法学習項目の6割から7割が組み込まれた日本語教材がこの時期（明治36～38年－引用者註）に既に開発されていた」と述べ、明治末期の日本語教材に現代の日本語教材の源流を見ている。

劉（2005）は、『日語入門』を「中国本土の日本語教育実践の現場で誕生し、かつ使用された最初の教科書として、注目すべきもの」〔劉（2005：233）〕とし、長谷川家に現存する諸史料を確認した上でその教授法を考察した。その結果を、「『日語入門』の会話内容の編成から見れば、彼がこの時代の日本語教育によく使われた『説話法』や『問答法』のほかに、現在広く行

われている GDM (Graded Direct Method) という段階的 direct 教授法に近い方法をも工夫していたことがわかる」〔劉 (2005 : 236)〕と述べ、高く評価している。

これに対し、谷口 (2011 : 342-343) は、明治期日本語教材『東語初階』と『東語真伝』を研究する際に、これらの前後に出版された日本語教材の一つとして『日語入門』を挙げているが、「同書は会話能力の習得を主要目的とした学習内容だが、体系的な構成になっていないことが大きな欠点といえる。」とその問題点を指摘しており、観点が異なるが、劉とは相反する評価を下している。

以上の先行研究は、池上以外いずれも『日語入門』を取り上げているが、(谷口は『日語入門』が第六版までであることを確認しているものの) 書誌学的な基礎作業を欠いており、また、劉と谷口については学習項目の綿密な検討を行わないまま研究を進めている。そのため、『日語入門』の本質的な特徴を明らかにするに至ってはいないと言える。

3. 長谷川雄太郎の略歴

長谷川雄太郎の経歴については前述の池上 (1985) が詳述しているので、それを参照しつつ略歴を紹介する。

長谷川雄太郎は、1865 (慶応元) 年 4 月 30 日に群馬県邑楽郡館林町 (現・群馬県館林市) で生まれ、後に奈良県十津川に移住、文武館 (現・奈良県立十津川高等学校) で宇田廉平に師事する。1888 (明治 21) 年に中国に渡り、1894 (明治 27) 年に一時帰国するまで「中国語並びに中国事情の研究」〔池上 (1985 : 84)〕を行った。その後、文部省の委嘱を受けて 1897 (明治 30) 年 3 月に再度中国に渡り広州同文館に赴任、1903 (明治 36) 年 5 月まで 6 年間日本語教育に従事したが、同年夏に帰国、翌 1904 (明治 37) 年 3 月 4 日に死去した。この帰国について、池上 (1985 : 86) は「夏季休暇で帰省」としているが、劉 (2005 : 231) は、減俸に対する不満からの辞任帰国と推定している。

筆者は、2003 (平成 15) 年に、長谷川の在籍記録等の有無について十津川高校に問い合わせたところ、同校校長 (当時) ・永曾昌弘氏より、同校は幾度も被災して古い資料は失われており、長谷川の在籍記録も不明である旨回答を得た。ただ、同氏より、宇田廉平の在職期間が 1882 (明治 15) 年 12 月から 1887 (明治 20) 年 12 月であったとの情報を得た¹⁾ことから、長谷

川が在籍していたのはこの期間に重なることが判明した。

以上が長谷川の略歴である。

4. 『日語入門』の書誌情報

4.1 『日語入門』現認諸本について

『日語入門』は、現在、その草稿が神奈川県横浜市の長谷川家に伝わっており、刊本は5冊の存在が確認されている。それらを表1に示す。

表1：『日語入門』草稿、及び諸本一覧

	所 蔵 先	版	発行年月日	小論の略称
1	長谷川家	草稿	— —	草稿
2	長谷川家	(初版)	明治34年 2 月 7 日	長谷川本
3	東京都立中央図書館実藤文庫	(初版)	明治34年 2 月 7 日	実藤本
4	北海道大学附属図書館札幌農学校文庫	再版	明治37年 5 月25日	北大本 ²⁾
5	中村重穂(筆者)	四版	明治38年 6 月25日	中村本
6	富山大学附属図書館梶井文庫	六版	明治40年 2 月20日	梶井本

これらのうち、草稿は、袋綴じを何枚ずつか紙縫りで綴じた綴毎に分けられており、全部で21綴から成る。長谷川家には、この他に『日語楷梯』という稿本があり、これについて劉(2005:235)は、『日語入門』と「内容がほとんど変わっていない。ただ、…(中略)…『挨拶』や『称呼』のようなまとまりの悪い部分を削除し、『日語楷梯』という新しい書名が付けられている。」と述べている。筆者は、長谷川家のご厚意により草稿と『日語楷梯』を両方とも複写させていただいたが、両者の比較はまだ行っておらず、また長谷川本は実見したが複写していないため、小論では草稿のみを取り上げ、必要に応じて長谷川本を参照する。

4.2 諸本の形態

草稿以外の諸本は実藤本を除いて全て四ツ目袋綴じ和装本であるが、表紙の色は、長谷川本が水色、実藤本が黒色、その他が黄色である。表紙に「日語入門」の題簽が付されているが、実藤本だけは題簽を欠く。

大きさは、草稿が、一部の葉³⁾に破損があるが概ね縦24.4cm×横16.7cm、長谷川本が縦23.0cm×横15.8cm、実藤本が縦23.0cm×横15.7cm、北大本が縦23.0cm×横15.3cm、中村本が縦22.8cm×横15.5cm、梶井本が縦22.7cm×

横15.3cmである。

ページ付けは、草稿、実藤本＝長谷川本、北大本＝中村本＝梶井本の三つで異なっている。いずれも1葉を二つ折り＝2ページ分としているが、草稿は1葉を折った右半分の左下（＝開いた状態では中央折り線の下右）にページ付けがされている。但し、最後の第21綴のみ1葉の右下にページが記されている。実藤本＝長谷川本では1葉の左下にページ付けがされている。以上の諸本では、袋綴じ1枚が1ページとなっている。これに対し、その他の三本は全て1葉二つ折りの左右にページ付けがされ、袋綴じ1枚が2ページとなっている。そのため、草稿は一部にページ記載箇所破損があるため推計となるが－総計177ページ、実藤本＝長谷川本では135ページ、その他の三本は268ページとなっている。

4.3 諸本の構成

まず、全ての本に共通するのは五十音、発音、カテゴリ別の語彙一覧とそれらに続く「造語篇」である。五十音は、各音の他に語例24語、発音は、鼻音「ン」と語例14語、濁音各音と語例24語、半濁音各音と語例13語、拗音各音と語例28語、促音各音と語例23語、転呼音語例52語から成り、語彙一覧は30のカテゴリ（数目、月日、時刻、七曜日、四季、方角、天文、地理、人倫、身体、宮室、家具、化粧道具、食事道具、文具、農工商具、服飾、飲食、野菜、果物、草木、魚貝類、鳥、獣、蟲、職業、舟車類、金石類、薬、貿易品）に分けられ、上記見出し語30語と語例1,293語が挙げられている。「造語篇」は第一～第九十の課に区分され、後掲表3の語句・文法・文型が提示されている。

この他、草稿には「日本仮名字体」がなく、また、草稿と実藤本には「例言」がない。他の諸本では、冒頭に「例言」2ページが、続いて「日本仮名字体」2ページがあり、その後に五十音が続く。これについて付言しておく、劉（2005：232-233）は、実藤本をテキストとすることを述べた上で、「『日語入門』は『序』もなく『跋』もない」と書いているが、上記のように草稿と実藤本以外の諸本には「例言」という序文に相当するものが存在する。後に詳述するが、実藤本には様々な難点があり、それをテキストとし（かつ他の諸本との校合をしなかつた）ことで劉の研究には種々問題が生じていることを指摘しておく。

4.4 奥付の情報

草稿を除いて全ての本に奥付があり、全て「著作兼発行人長谷川雄太郎」、また「発行所善隣書院」となっている。但し、実藤本＝長谷川本では「印刷人川名保五郎 印刷所和成堂」、他の諸本では「印刷人天野耕一 印刷所秀英舎第一工場」となっており、印刷会社が変更されたことが分かるが、その理由は不明である。ここに「善隣書院」とあるのは、池上（1985：85）によると、長谷川に広東赴任の依頼を伝えた、明治～昭和戦前の中国語教育者である宮島大八が1898（明治31）年に創設（改称）した中国語私塾である。特に、中村本の奥付には「善隣書院」の蔵書印が押されており、同塾が所蔵していたものと推定される。

版については表1に示したが、より詳しく記すと、長谷川本と実藤本には、「初版」という文言はなく；

明治三十四年二月一日印刷

同 年同月七日発行

とのみ印刷されており、後の諸本はこれを踏まえ、例えば北大本では；

明治三十四年二月一日印刷

同 年同月七日発行

同 三十七年五月二十五日再版印刷発行

と印刷されている。これらから考えて長谷川本＝実藤本を表1では「（初版）」としたが、これは誤った判断ではないと考える。

また、梶井本の奥付からは、未確認の三版が1904（明治37）年12月15日に、五版が1906（明治39）年1月28日に印刷発行されたことが判る。長谷川は上述のように1904（明治37）年3月4日に死去しているが、『日語入門』は長谷川死後もなお版を重ねたのである。

4.5 その他の版について

前節で長谷川本＝実藤本を「（初版）」とした。ところが、さねとう（1960：62）を見ると、現在見られる『日語入門』に先だって1900（明治33）年にも同じく長谷川の著書として同名の『日語入門』が刊行されたという記述がある。発行所についてさねとうは「（広東同文館？）」と書いており明確ではないらしいが、ページ数については「109丁」（丁は葉と同じく紙1枚＝袋綴じで2ページ分を表す）と記している。

この『日語入門』は現在のところ未確認であるが、劉（2005：232）は；

「これは、広州同文館の発行と思われる109丁（丁は紙1枚、つまり2頁のこと）のものであったとされるが、初版本は見付かっていない。筆者（劉－引用者註）は東京都立中央図書館特別文庫室で偶然に図7-2-1に示した1901年善隣書院刊の135丁のもの（欠如の頁あり）を発見した。これは1900年の版本より26丁増えているので、著者が多少内容を足した増訂版と考えられる。本節ではこれをテキストとする。」と述べている。確かに劉の指摘通り109丁の『日語入門』は見付かっていないが、それ故に実藤本との比較ができない以上、実藤本を「増訂版」とする根拠は乏しく、もしそうであるなら奥付に「増訂版」と記されていてよいはずである。この点については、さらなる史料探索が必要とされると共に、劉の見解には一定の留保が付けられねばならないと考える。

5. 諸本校異

本章では、諸本の校合の結果を報告する。ただ、今回は長谷川本を全体にわたって参看できていないため、これ以外の5冊を対象としてある。また、5冊全部が同じ間違いを含む場合は、これを含めていない。（例：草稿p.125／実藤本p.94／その他p.187「東門カラ逃ケテ往キマシタ」の「逃ケテ」の濁点脱落）。そして、特に草稿、実藤本とその他の間に見られる異字形（例：船⇄船）も取り上げていない。

5.1 諸本相違箇所の出現状況

校合の結果、5冊の間で506箇所の違いが明らかとなった。但し、小論ではそれらの一覧を示すことが不可能なため、諸本の相違箇所の出現状況をまとめたものを表2に示す。表中で「その他」としてあるものはそれら諸本の間に相違箇所がないことを示す。また、草稿と実藤本には欠落部分があるため、それらの箇所の相違点は表2の24～28に示す。

これらの相違の多くは、草稿と実藤本と北大本の間で発生しており、北大本・中村本・梶井本は大部分が共通しているが若干の誤植等による相違も認められる。相違箇所は、既述の「例言」「日本仮名字体」の有無とページ付けの違いを除けば殆どが改行位置の違いであり、その他には誤植・誤記（例：濁点の脱落、訪問、出来マセスカ、等々）、脱字、句読点・符号・傍線・ルビの有無等があるが、文（章）の書き換えはない。

表 2：諸本の相違箇所の出現状況

	出 現 状 況	出現数
1	草稿＝実藤本でその他が異なるもの	192
2	草稿と実藤本とその他が異なるもの	96
3	草稿のみその他と異なるもの	61
4	実藤本のみその他と異なるもの	46
5	中村本のみその他と異なるもの	15
6	梶井本のみその他と異なるもの	11
7	北大本＝梶井本でその他が異なるもの	8
8	中村本＝梶井本でその他が異なるもの	4
9	草稿＝実藤本と北大本＝梶井本と中村本が異なるもの	3
10	北大本＝中村本と草稿と実藤本と梶井本が異なるもの	2
11	中村本＝梶井本と草稿と実藤本と北大本が異なるもの	2
12	草稿＝実藤本と中村本＝梶井本と北大本が異なるもの	1
13	草稿＝北大本と中村本＝梶井本と実藤本が異なるもの	1
14	実藤本＝中村本と北大本＝梶井本と草稿が異なるもの	1
15	実藤本＝北大本と中村本＝梶井本と草稿が異なるもの	1
16	北大本＝梶井本と草稿と実藤本と中村本が異なるもの	1
17	草稿＝北大本でその他が異なるもの	1
18	草稿＝中村本でその他が異なるもの	1
19	草稿と梶井本とその他が異なるもの	1
20	草稿と中村本とその他が異なるもの	1
21	草稿と北大本とその他が異なるもの	1
22	実藤本と北大本とその他が異なるもの	1
23	実藤本＝中村本でその他が異なるもの	1
24	草稿の欠落部分で実藤本とその他が異なるもの	13
25	実藤本の欠落部分で草稿とその他が異なるもの	37
26	実藤本の欠落部分で梶井本とその他が異なるもの	2
27	実藤本の欠落部分で中村本とその他が異なるもの	1
28	実藤本の欠落部分で草稿＝北大本と中村本＝梶井本が異なるもの	1

5.2 諸本の相違箇所に関する蓋然的検討

前節で挙げた相違点は506箇所以上あった可能性がある。その推定根拠

として前述の草稿、及び実藤本の落丁・乱丁を挙げたい。

草稿は、第15綴136葉左半双末尾で切れて、第16綴147葉右半双までが欠落している。また、全21綴のうち第18～20綴の間で乱丁が生じており、第18綴はページ記載箇所が破損しているが本文から復元すると154葉右半双の半分から158葉右半双の2/3までで、第19綴は153葉から154葉右半双の初めの部分までと167葉から169葉左半双の半分までが一緒に綴じられており、第20綴はこれもページ記載箇所が破損しているが158葉右半双終わりの2/3から167葉右半双1行目までとなっている。従って、ページの順序通りに配列すると第19綴前半→第18綴→第20綴→第19綴後半となる。これは伝わる過程で処理に誤りが生じたものと思われる。小論ではこれらの箇所を可能な限りページの順序通りに校合したが、脱落・破損箇所に相違点があった可能性もある。

また、実藤本の落丁・乱丁は、まず、語彙一覧の30のカテゴリのうち「家具、化粧道具、食事道具、文具、農工商具、服飾、飲食、野菜、果物」が脱落（10葉分）している。加えて、38葉右半双で語彙一覧が終わった後、左半双からは本来なら「造語篇・第一」が始まるべきところ、1.5葉飛んで「造語篇・第二」の4行目「トホイ チカイ」（＝39葉左半双）から40葉右半双までページが続く。そして、その後、38葉左半双「造語篇・第一」から39葉右半双までの部分が続き、以後40葉左半双から正確なページ付けに戻る。このため、特に語彙一覧の脱落箇所に相違点があった可能性がある。

この実藤本の落丁・乱丁について、同じく「(初版)」である長谷川本の状態を長谷川家現当主・長谷川英之氏に書面で確認したところ、長谷川本には語彙一覧の脱落がなく、37葉→38葉→39葉の順序で正しく並んでいることをご教示いただいた。⁴⁾

実藤本にかかる落丁・乱丁が生じたのは、前述のように実藤本が題簽を欠くことと考え併せると、東京都立中央図書館への収蔵過程に理由があるのではないかと推察される。さねとう（1966：iii）によると、実藤は日比谷図書館（現・東京都千代田区立日比谷図書文化館）長・中田邦造に蔵書の疎開を求め、それらは奥多摩に移されて敗戦を迎えた。敗戦後；

「疎開された本は帰ってきたが駿河台→京橋→日比谷とうつつているうちに水災などあって廃棄したものもあった。…（中略）…わたくしのもそうとうわからなくなったのがある（とくに中国人の日本語学習書は1/3ぐらいわからなくなった）がやむをえない。」

という経過を辿っている。この中で実藤本も破損して補修されることがあり、その際に一部が脱落・乱丁となったのではないかと推察される。

そして、先述のように劉（2005）の研究には、実藤本をテキストとした結果、瑕疵が生じている。既述の、他の諸本に於ける「例言」の存在に気づいていない点のみならず、語彙一覧について劉（2005：234）は；

「数目・月日・時刻・曜日・四季・方角・天文・地理・人倫・身体・
宮室・草木・魚貝類・鳥・獸・虫・職業・舟車類・金石類・藥・貿
易品の諸項目の語と語句を958個収録している。」

としているが、これは他の諸本と校合すれば実は30カテゴリ・1,293語であることが分かったはずである。劉（2005：232）は実藤本の乱丁を把握していたことを述べているのだから、注意して見ればページ付けの不整合等から脱落に気づき、かかる記述は回避できたろうと思われる。

以上の校異から、実藤本はその史料価値に若干の問題が認められること、また、これに関連して劉の史料に対する姿勢・取り扱い方には不十分な点があることが明らかとなった。もし長谷川本も参看できていたなら、さらに相違点が見出された可能性があることも付記しておきたい。⁵⁾

5.3 草稿と実藤本の関係

本節では、校合の結果、草稿に確認された「(初版)」と対応する書き込みについて報告する。但し、小論では長谷川本を参看していないため、実藤本を対象とする。

この書き込みの最初のものは、草稿の20葉右半双3行目「齒」の下に赤字で「十五ノ一」と書かれており、これは実藤本15葉左半双最終行「齒」に対応する。そして、以下、落丁・乱丁はあるが、葉・半双の区切りに対応するこのような書き込みが草稿の最後まで続いており、その総数は185箇所になる。

但し、草稿の20葉以降と実藤本の15葉以降の全てが対応しているわけではなく、一部の箇所には書き込みがなく、また後述するような位置のずれもある。

この書き込みは、実藤本15・16葉に対する箇所のみ漢数字で書かれているが、それ以降は3箇所を除いて全てアラビア数字で書かれている。各葉の左半双最終行を表す場合には葉の番号のみ（例：46）、または葉の番号＋アラビア数字（例：56 1－原文縦書き）と書かれ、右半双最終行を表す場

合には、葉の番号+「ノ二」(例：32ノ二)、葉の番号+「二」(例：117二)、葉の番号+アラビア数字(例：56 2-同上)のいずれかの形で書かれている。3箇所のみは数字がなく、代わりに「\」が書かれている。

これらの書き込みは、草稿102葉左半双2行目から、実藤本の葉の左／右半双最終行と対応せず1行ずれるようになり、それが137葉右半双3行目まで50箇所にとわたって続く。但し、うち6箇所では1行ずれた箇所の左の行=正しく対応している行に赤字で「\」または「|」が書かれており、さらに、以下の3箇所では、ずれた箇所の後に正しく対応している箇所が赤字漢数字で書き込まれている(矢印の右が正しい対応)。

- ・草稿135葉右半双5行目-101→135葉左半双1行目――〇一ノ二
- ・草稿136葉右半双1行目-102→136葉右半双3行目――〇二
- ・草稿137葉右半双3行目-102ノ二→137葉右半双5行目――〇二ノ二

これらの書き込みは、草稿と実藤本(初版)の書き込みが7割以上対応していること、最終葉まで書き込みがあること、対応がずれたページの幾つかに正しい対応箇所を示す書き込みがあることから、長谷川自身、または印刷会社の和成堂が、印刷前にページの割り付けのために書き込み、その後、草稿と刷り上がり本との間でずれが生じた箇所を註記しておくために記したものと思われる。あるいは、ずれを記した箇所は、割り付けの修正のために追加記入したとも考えられる。これらの対応は、おそらく長谷川本との間でも成立し得るものではないかと思量する。

6. 指導項目と教授法をめぐる考察

本章では、『日語入門』の指導項目を析出した上で、第2章で言及した、劉と谷口による相反する評価についても検討してみたい。

6.1 指導項目について

『日語入門』の指導項目(文法・文型)を析出したものを表3に示す。これは、長谷川自身が指導項目としたものを「」で表し、それ以外は、現代の文法シラバスの観点からの「初級段階における一般的な指導内容の骨組みと手順を示した一つのモデル」〔川瀬(1986:105)〕である鈴木・川瀬(1981)『日本語初歩』とそれに続く川瀬・伊藤・小出・才田(1990)『日本語中級Ⅰ』、川瀬・富田・藤井(1996)『日本語中級Ⅱ』(全て国際交流基金日本語国際センター)が挙げる文型・文法事項等に準拠した。

表3：『日語入門』『造語篇』指導項目一覧

課番号	項 目	文数(*)
一	イ形容詞、イ形容詞＋名詞(修飾用法)	20
二	イ形容詞、イ形容詞＋名詞(修飾用法)	24
三	イ形容詞、イ形容詞＋名詞(修飾用法)	22
四	イ形容詞、イ形容詞＋名詞(修飾用法)	20
五	イ形容詞、イ形容詞＋名詞(修飾用法)	22
六	イ形容詞、イ形容詞＋名詞(修飾用法)	20
七	格助詞「ノ」(名詞1ノ名詞2：属性・位置基準・所有・材質)	19
八	格助詞ノ(名詞1ノ名詞2：所屬・位置基準・材質・内容)	18
九	格助詞ノ(名詞1ノ名詞2、名詞1ノ名詞2ノ名詞3：位置基準)、位置表現(上、下、中、傍、前、後、内、外、右、左)	20
十	格助詞「ト」(並立)(名詞1ト名詞2)	20
十一	格助詞ト・ノとイ形容詞を組み合わせた名詞句	20
十二	格助詞「ニ」(場所格、並立格：名詞1ニ名詞2)	21
十三	格助詞「ガ」(主格)、自動詞(辞書形)→自動詞文	28
十四	格助詞「ヲ」(対象格、移動場所・経路)、他動詞(辞書形)→他動詞文、動詞買フ、移動動詞アルク	29
十五	名詞＋格助詞「ニ」(対象格・場所格)＋自動詞文、移動動詞登ル／上ル・帰ル	27
十六	係助詞「ハ」、イ形容詞文(イ形容詞叙述用法)、ハ－ガ構文	19
十七	格助詞「デ、ニテ」(方法・手段)、名詞＋デ＋他動詞、移動動詞渡ル	30
十八	存在動詞「アル、キル、ヲル」、名詞＋ニ(場所格)＋存在動詞文、位置表現(側)	23
十九	「人称詞」(一人称、二人称)、接尾辞タチ・共・等	26
二十	人称詞1＋ト＋人称詞2、人称詞＋ノ＋名詞、人称詞による自動詞文、移動動詞往ク・走ル	22
二十一	指示詞「コ／ソ／アレ、コ／ソ／アノ」、補助形容詞「ナイ」、副詞「余り(～ナイ)」、指示詞を使った形容詞文・存在動詞文	22
二十二	副助詞「モ」、形容詞ナイ、イ形容詞の副詞化(ーク)	24
二十三	「動詞テ形」、「～テキル」(状態継続・動作進行)、「～テアル」、「～テアル」、「イ音便」、「促音便」、～テミル、～テイク、～テクル、付帯状況のテ形	15
二十四	「動詞マス形」(アリマス、居リマス、居マスのみ)、「ココ／ソコ／アソコ」、「撥音便」	18

二十五	「常言⇔敬辞」(=常体と敬体の対応)、格助詞ニ(方向)	20
二十六	既出語・新出語を用いたマス形による例文、方法・手段のテ形	12
二十七	「デアリマス」、「デス」、「デアル」、「ダ」	15
二十八	疑問詞「ナニ」、疑問終助詞「カ」、「ナニカ」、「ナニデアリマス カ」、「ナニデスカ」、コレ／ソレ／アレ／アレの対応、物の名称 に関する問答、接尾辞～語	20
二十九	動詞「オモフ」、「オモヒマス」、「オモフカ」、「オモヒマスカ」、 格助詞ト(引用・内容)、複文(コレハ何デアルト思ヒマスカ)、 何デアルト思ヒマスカー名詞+デアルト思ヒマスを中心とした 問答	20
三十	動詞「イフ」、何ト云フ+名詞(連体修飾節)、物の名称を尋ね る問答	13
三十一	指示詞二何ガアリマスカを用いた問答、アチラ／コチラ／ソチ ラ(※六十で項目化)	18
三十二	場所二何ガアリマスカ／居リマスカを用いた問答、位置表現(フ チ)	16
三十三	場所二何ガ動詞+デアリマスカ／テ居リマスカを用いた問答	14
三十四	好き・好ムを用いた常体と敬体の問答、動詞辞書形+形式名詞 コト、最上級副詞一番	16
三十五	準体助詞ノ、分裂文、動詞+ノ／名詞ハ何デアリマスカー〔名 詞の属類〕デアリマスを用いた問答	16
三十六	形式名詞モノ、ナ形容詞連体形(修飾用法)、格助詞ノ(主格)、 嫌ヒ／好きを用いた問答	16
三十七	格助詞デ(材料)、格助詞二(目的)、物の名称・用途・材料を問 う問答	16
三十八	「拵ヘル」、格助詞「ニ」(場所格)+ハ、材料・素材・内容物 を問う問答	17
三十九	「現在語」(動詞辞書形・マス形)、「過去語」(動詞タ形・～マ シタ)、「未来語」(動詞意向形・～マセウ)、副詞「モウ」、～マ ス→～テイマス→～マシタ→～マセウの順序例文提示、勧誘表 現～マセウ	21
四十	～ノデアル、既出語・新出語を用いた問答(「現在語」のみ)、 取り立て助詞ニハ	16
四十一	「現在語」、「過去語」、「未来語」、移動動詞来ル、接続助詞ト、 接続助詞カラ(理由)、格助詞カラ(起点)、他動詞マス形の習 慣的用法	24
四十二	「為ス」、「スル」、「致ス」、「スル」及び「致ス」のマス形、接 続助詞「タリ」	16

四十三	「現在語」、「過去語」、「未来語」、格助詞ニ（時点）、副詞スゲニ、接尾辞〜時	24
四十四	ナサル、何ヲスルのヴァリエーション（常言⇔敬辞、現在語・過去語）による疑問文－他動詞文の回答による問答	16
四十五	申ス、仰ッシャル、疑問詞誰（タレ）、接頭辞御、接尾辞〜サン、姓名を問う問答	15
四十六	「現在語」、「過去語」、「未来語」、〜前ニ、〜内ニ、気候の表現	24
四十七	「タレ」、「ダレ」（※四十五で既出）、ダレカ⇔ダレガ、動詞－マセヌ（※マセスと誤植）、疑問詞誰を用いた問答	18
四十八	「現在語」、「過去語」、「未来語」、副詞ヨク（※三十二で既出）	24
四十九	誰・誰カ・誰ガを用いた問答	14
五十	「現在語」、「過去語」、「未来語」、条件的例示の（名詞＋）デモ、〜ニ因ッテ、順次動作を表す動詞テ形、接続助詞バ、格助詞ニ（対象格）、格助詞カラ（奪格）、知覚動詞知ル	24
五十一	誰ノ＋名詞、誰ニ＋動詞、名詞1ノ名詞2からの名詞2の省略、格助詞デ（場所格）、格助詞ニ（奪格）、場所名詞句の〜ノ処、誰ノ・誰ニを用いた問答	14
五十二	「現在語」、「過去語」、「未来語」、格助詞ヘ（到達点）、ナ形容詞の副詞化（〜ニ）、〜間	24
五十三	格助詞ト（相手格）、〜ト一所〔ママ〕ニ、疑問詞誰カラ・誰ト・誰ヲを用いた問答	14
五十四	「現在語」、「過去語」、「未来語」、〜ヨリ（比較級）、接続助詞テモ、格助詞デ（範疇）	24
五十五	「ドコ」、「御座リマス」、「御座イマス」、ドコノ＋名詞、位置表現（隣リ）、疑問詞ドコ・ドコノ・ドコニを用いた問答	19
五十六	何処ニ／何処デを用いた問答、御〜ナサル、位置表現（隅）	16
五十七	格助詞ヘ（方向）、格助詞ニと格助詞ヘの違い、イラッシャル、参ル、位置表現（奥）、何処ニ／何処ヘ＋尊敬表現を用いた問答	16
五十八	副助詞マデ（到達点）、理由を表すテ形、何処ニ／何処ヘ＋尊敬表現を用いた問答	16
五十九	副助詞ナド、移動動詞通ル、何処カラ／何処ヘ／何処ヲを用いた問答	16
六十	「ドチラ」（場所の疑問詞＋選択疑問詞）、「アチラ」、「ソチラ」、「コチラ」、ドチラデモ、ウ音便、ドチラ＋尊敬表現を用いた問答	20
六十一	「ドレ」、ドレデスカ／ドレ＋格助詞＋尊敬表現を用いた問答	18
六十二	「ドノ」、皆（ミンナ）、推量の助動詞ヤウデス、ドノを用いた問答	17

六十三	「ドンナ」、「ドノヤウナ」、イ形容詞の連接、ドンナ／ドノヤウナを用いた問答	18
六十四	「コンナ」、「コノヤウナ」、「ソナナ」、「ソノヤウナ」、「アンナ」、「アノヤウナ」、動詞タ形による連体修飾、ナ形容詞連用形（叙述用法、デ御座イマスと結合）、ドンナ／コンナ／ソナナ／アンナを用いた問答	22
六十五	「ドウイフモノ」、「ドンナモノ」、「ドウイフコト」、「ドウイフワケ」、～（ノ）外ニ、命令形（シロ）、接続助詞ガ、イ形容詞否定形、格助詞ニ（変化の結果）、ナル、可能・自発の助動詞レル、ドウイフモノ／ドウイフ＋名詞／ドウイフコト／ドウイフワケを用いた問答	20
六十六	「ナイ」（助動詞）、「ヌ」、「アリマセヌ」、「ゴザリマセヌ」、「シナイ」、「セヌ」、「シマセヌ」、「ナサリマセヌ」、否定推量の助動詞マイ、何モ＋否定詞、否定疑問文と否定の回答による問答	30
六十七	否定文、副詞マダ、可能形出来ル（否定形で）、動詞・辞書形＋コトガ出来ル（否定形で）、御存知デス（否定形で）、否定回答の問答	20
六十八	「過去格否定語」（敬体・常体）、「未来格思量語」（＝マイ、六十六で既出）、可能の助動詞ラレル、御目ニ掛ル	18
六十九	「クレ」、「下サイ」、「ヤル」、「上ゲマス」、「シロ」（六十五で既出）、「ナサイ」、御～ナサイ	38
七十	「貸シテ下サイ」、「貸シテ上ゲマス」、「返シテ下サイ」、「返シマス」、「換ヘテ下サイ」、補助動詞～テ下サイ／テ上ゲマス、応答詞ハイ	27
七十一	「吩咐語」（＝命令形、～ナサイ、六十九で既出）、「希求語」（＝～テクレ、～テ下サイ、七十で既出） ※ 40 例は「動詞・テ形＋来ル」（二十三で既出）のヴァリエーション	84
七十二	動詞テ形＋御出ナサイ、貸シテ下サイ／動詞テ形＋来ナサイ／来テクダサイを用いた問答	17
七十三	「禁止語」（＝「ナ」、「ナサルナ」、「イカヌ、イケヌ、イケナイ」、「イケマセヌ」、「ナラヌ」、「ナリマセヌ」）、アガル（※食ベルの最敬語として）	28
七十四	「ホシイ」、「タイ、タク、タシ」、貰フ、補助動詞（～テ）貰フ	28
七十五	「イカゞ」、「ドウ」、「ドウシテ」、「何故（ナニユヘ [ママ]）」、「ナゼ」、「ナゼカ」、「ドウシタコトカ」、意向・理由を問う疑問詞を用いた問答	23
七十六	「ドウシタカ」、「ドウシマシタカ」、「ドウ致シマシタカ」、「ドウシテ居ルカ」、「ドウシテ居マスカ」、ヤル、動詞テ形＋シマフ、「ドウシマシタカ／ドウシテ居マスカ／ドウシテ御居デナサイマスカ」を用いた問答	21

七十七	動詞タ形＋コトガアル（敬体否定形で）、疑問詞節、～ネバナラヌ、副詞ドウゾ、～ノ為メニ、副詞ドウモ、副詞ドウシテモ、「ドウ」のヴァリエーションを用いた問答	16
七十八	「ドウシテ作ルカ」（＝作り方を問う疑問文）、～通りニ、格助詞ト（変化の結果）、既習の疑問詞を用いた問答	17
七十九	「イクニチ」、「イクカ」、「ナンジ」、「ナンドキ」、「イツ」、「イクツ」、～頃、召上ル、動詞・辞書形＋ツモリダ、時間・年齢の疑問詞を用いた問答	34
八十	「イクラ」、「ドノ位」、「何程」、「イカ程」、授受動詞貰フ、値段を問う疑問詞を用いた問答（※一部、「イツ」、「ドコ」、「誰」との併用を含む。）	20
八十一	「ドレ程」、ドノ位・ドレ程を用いた問答	17
八十二	助数詞枚、帖、疋／何疋／幾疋、羽／幾羽／何羽、本／何本／幾本、冊、部、接続助詞ノデ、イ形容詞連用中止形～ク、何＋助数詞を用いた問答	15
八十三	助数詞挺、組、対、足、ゼン（箸）、ヒトリ、フタリ、四ツタリ、人、格助詞デ（限度）、接続詞尤モ	15
八十四	助数詞台、張、フリ、門、艘、通、封、束、把、筋、株、輪、房、粒、助数詞＋ノ＋名詞、位置表現（先）	16
八十五	「トハ」、「ヨリ（モ）」（五十四で既出）、疑問詞ドウイフ、定義の文型（～トハ～ト云フコトデス）、何デスカ／ドウイフ意味デスカを用いた問答、比較の文型	18
八十六	副助詞や、～モ～モ、～ナケレバナリマセヌ、受け身助動詞ラレル／レル、格助詞ニ（受け身の動作主）、受け身文（直接受け身・持ち主の受け身）	16
八十七	「挨拶」、各種挨拶表現、従属節～動詞・辞書形／タ形＋時ニ、動詞・テ形＋カラ、～ニ対スル	29
八十八	種々の挨拶表現（気候・安否に関するもの）、有難ウ御座イマス、御陰様デ、文脈指示のソレハ	35
八十九	種々の挨拶表現（年末年始・慶弔時・初対面・労いに関するもの）	18
九十	「称呼」（＝親族呼称）、「向人称謂語言」（＝対他尊称）、「向人自称語言」（＝ウチのグループの対他表現）	63
文総計	（＊）本表の「文」は名詞句、形容詞句等も含む。	1931

表3から、学習の初期段階で集中的に助詞を核とした構造を与え、徐々に機能や表現毎に関連がある（と長谷川が考えた）ものをまとめて提示していくように構想されたことが窺える。加えて、特に「過去語・現在語・

未来語」を徹底して導入した後の55課以降疑問詞を指導項目とする課が多くなること、これに連動するように本文が問答中心になっていくことから、長谷川が『日語入門』を会話力養成に力点を置いた－現代的に言えば運用能力重視の－教科書として作成したことが見て取れる。

しかし、機能／表現毎のまとまりは、例えば、イ形容詞（1～6課）、存在表現（18課）、アスペクト（23課）、「現在語・過去語・未来語」（39～54課）、授受表現（69課・74課）等では一応形を為しているが、詳細に見ていくと、その内容や提出順序については、もし劉（2005：234）が言うように「実際この順序によって指導したと考え」るなら学習者の混乱や負担は少なくなかったと推定される。

具体的に言えば、長谷川が「未来語」としているのは、今日的に言えば動詞・意向形と「マセウ」であって、確かに時間的には未来を含むが、現在なら「未来」の表現としては教えないものである。また、アスペクトとして「～テキル」、「～テヲル」、「～テアル」、「～テイク」、「～テクル」（＋「～テミル」も）が一つの課でまとまって出てくるが、これを一斉に教えられたら学習者は理解に相当な困難を強いられたであろう。

そして、全体的に見ると、機能／表現毎のまとまりは認められても、それらが体系的に配置されているとは言いがたい。初期段階で「ハ」を習うのと同じ課で一気に「ハーガ構文」まで提示されたり（16課）、初級の指導項目の中に中上級の指導項目である分裂文や助動詞「～マイ」や接続詞「尤モ」等が現れたり、後の課で指導項目化されている表現が前の課で出ていたり（例：32課「アチラ／コチラ／ソチラ」→60課で項目化）しており、項目の配列に十分な注意が払われていない面がある。以上のように見ると、先に挙げた谷口の評価はほぼ妥当とも言える。

6.2 教授法について

教授法の観点から見た場合、長谷川が『日語入門』を使ってどのような教え方を（想定）していたのかを明らかにすることは難しい。これについて劉（2005：236）は、前述のようにGDMに近い方法を実践していたと推定している。しかし、この推定には二つの点から疑義がある。

まず、もし長谷川がGDMを用いたのであれば、『日語入門』の語や文に中国語訳は付けなかったはずである。現実には、（全ての文にではないが）新出語や一部の文には中国語訳が付されており、この点でGDM、あるいは

は直接法に類する教授法を想定していたとは考えにくい。

もう一つの問題は、『日語入門』の指導項目配置が、GDM の指導方針とずれを生じる、ということである。以下では、吉沢 (1978)・吉沢 (1986) に依りつつこの点を検討してみたい。なお、吉沢は、GDM の開発者である I. A. Richards の門下生であった。

劉が GDM を主張する根拠は、『日語入門』で「『わたし／あなた』や『これ／それ／あれ』、『ここ／そこ／あそこ』という人称代名詞と指示代名詞の内容が孤立して入れられたこと」が「feed-forward という原則に合致する」〔劉 (2005 : 236)〕という点である。また、GDM の要点である SEN-SIT (= 「教師や生徒の発言や内容が、教師や生徒の動作や位置、実物の状態、絵の示す内容など一致していること」、吉沢 (1978 : 78)) で重視される「体と物を使った実演」や「絵を使う」イメージ化が窺われる教材本文 (31課、37課) があることも挙げている。

しかし、英語教授のための GDM と一概に同一視はできないとしても、単に「人称代名詞と指示代名詞の内容が孤立して入れられたこと」が「feed-forward という原則に合致する」とは言えず、劉自身がこの feed-forward に加えた註〔劉 (2005 : 239)〕で述べている；

「少し前に『これ／それ』、『ここ／そこ』を習った後、続けて『これは私の本です』『それはあなたの時計です』『ここに私の本があります』

『そこにあなたの時計があります』などを学習すれば、『これ－私』『それ－あなた』『ここ－私』『そこ－あなた』という形で既習事項が強化され、螺旋を描きながら学習段階が上がっていくという原則」

に照らしてみれば、『日語入門』では19課で第一人称・第二人称の人称詞が提示され、21課で「コレ／ソレ／アレ、コノ／ソノ／アノ」が、24課で「ココ／ソコ／アソコ」が提示されるが、21課でも24課でも本文は、「アレハ好イ」、「コレハ悪ルイ」、「ココニ椅子ガアル」、「ソコニ狗ガ居ル」等であり、「私」、「あなた」とは全く結びつけられていない。この点で『日語入門』の構成は feed-forward も feedback も成していない。

また、吉沢 (1986 : xiii) は「単語は必ず sentence のなかで教えなければならない。」と述べているが、『日語入門』では、単語だけが前半で集中的に提示され、命令形、依頼の「～テ下サイ」も単語だけの一覧で終わっている。このような構成、提示方法を GDM と結びつけるのは難しい。

さらに言えば、吉沢 (1986 : 8) は「所有格を教えるときには、ほんとう

にその人の所有物を使うこと、それには hand、nose などが便利である。」と述べているが、『日語入門』では所有格の「ノ」は他の「ノ」の働き、即ち属性、位置基準、材質とまとめて提示されている上に、「ほんとうにその人の所有物」ではなく、「竹ノ葉、松ノ枝、兄ノ子、弟ノ娘」などが初出であって、GDM の大原則である「文の内容をなるべく生徒に直接体験させるようにして、内容をともなわないまる暗記や、機械的な、練習のための練習は避ける」〔吉沢 (1986 : xi)〕ことや、GDM の指導項目決定に不可欠な grading が考えられていない。

これら以外にも、例えば、二人称と三人称の提出順序や、動詞の過去形・現在形・未来形の提出とその際の現在進行形との対比の重要性等について『日語入門』の指導項目提出順序では配慮が為されていない。

かかる問題点があるにも拘わらず、劉が GDM との親近性を主張したのは、劉のみに帰責されるべきことでなく、従来の GDM についての説明にも責任がある。全ての例は示せないが、例えば、吉沢 (1978 : 75) は；

「ここでテキストの最初の文、I am here. You are there (here). He (She, It) is here(there). の文に進む。このように、まず be 動詞の使い方を定着させることは、後の学習の基礎になることはもちろんであるが、その場所によって here と there を使い分けることは、次にくる this と that を区別することの下ごしらえになる。」

と述べ、また、日本語教育に於ける GDM について片桐 (1996 : 26-27) は；

「ひとつの原則は、すでに『わたし／あなた』がコソアへの伏線になっているという例でしめたように、『フィードフォワード : feed-forward』とリチャーズが呼んだことだ。それと対になるのは『フィードバック : feedback』である。すこし先のところで『これ／それ』をならったあとで、『これはわたしのほんです』『それはあなたのほんです』をすれば、『これ－わたし』『それ－あなた』というかたちで既習事項が強化される。GDM 学習はこのようにして行きつもどりつ、あるいは螺旋をえがきながら上っていく。」

と述べて、GDM の説明に人称代名詞と指示詞のつながりを用いている。

このような説明 (だけ) を読めば、人称代名詞から指示詞へと進む教科書を見たときに GDM と親近性があると誤解する危険性は確かに絶無ではなかろう。しかしそれでも、上述の検討を踏まえるならば、『日語入門』を GDM と結びつけるのは牽強附会であり、劉の研究は、『日語入門』の指導

項目の提出順序と GDM のあり方を、たとえ現代的な観点からであっても仔細に検討することを怠ったものと言わざるを得ない。

7. まとめ

前章までの分析・考察から『日語入門』の特徴についてまとめたい。『日語入門』は、執筆当時の日本語文法研究の時代的制約はあったかもしれないが、一定の構造的な枠組みを持って問答法を軸に学習者の会話能力を伸長することに目標を置いた実践的な教材であったとすることができる。一方で、その教授法については、なお解明困難な点が多く、特に具体的な教室活動については推定／再現することは難しい。

構造的な特徴を挙げるとすれば、－ここでは劉と同じく GDM の用語を用いるが－(i) content word と structure word をある程度分けて示した上で文型の練習への準備を整えていること、(ii) 特に「造語篇」前半で structure word を集中的に明示していることである。ただ、(i) については、明治～戦前期の教科書に比較的に見られるものであり、『日語入門』だけの特徴とは必ずしも言いきれない。

また、今後の課題として以下のことを挙げておきたい。

- a. 長谷川本を含めた『日語入門』諸本の書誌学的・文献学的分析
- b. 吉岡(2002)の考察を引き継ぐ、現代日本語教科書の“源流”としての『日語入門』の特長の分析
- c. 『日語入門』草稿に見られる修正箇所の洗い出しと修正点の考察を通じた長谷川雄太郎の教科書作成方針の解明
- d. 長谷川家所蔵の諸史料、特に『日語楷梯』との比較による『日語入門』成立過程の解明

これらに加えて、未確認の第三版と第五版、そして109丁の『日語入門』の探索も必要である。

今後は、上記の諸課題に取り組むことを通して『日語入門』という教科書だけでなく、長谷川雄太郎という日本語教育の黎明期を支えた人物とその事績をより総合的に明らかにして日本語教育史研究の中に位置づけることを目標としたい。

謝辞

小論執筆にあたり、多年にわたり多大のご指導ご教示を賜った長谷川家

現当主で長谷川雄太郎ご令孫の長谷川英之先生・文子様ご夫妻には心から御礼を申し上げます。長谷川先生ご夫妻のご支援なしにはこの研究は進められませんでした。ありがとうございました。また、史料・情報のご提供に与った東京都立中央図書館特別文庫室、富山大学附属図書館、北海道大学附属図書館と、早稲田大学名誉教授・吉岡英幸先生、奈良県立十津川高等学校元校長・永曾昌弘先生、及び北大本の収蔵過程照会に迅速なご対応を賜った北海道大学附属図書館調査支援担当の城恭子氏・長嶋岳生氏にも深甚の謝意を表します。

註

- 1) 2003 (平成15) 年12月1日、十津川高校からの電話による回答。
- 2) 北大本は、1904 (明治37) 年11月24日に札幌農学校図書館受け入れとなっている。購入先は丸善である。
- 3) 「葉」は紙などの1枚を表す。袋綴じ本では二つ折りにする。
- 4) 2014 (平成26) 年4月6日付書簡による回答。
- 5) 但し、実藤本に旧所有者の書き込みではないかと思われる箇所もあり、そうであれば逆に相違点が若干減る可能性もある。

参考文献

- 池上貞一 (1985) 「長谷川雄太郎と広州同文館 (上)」『紀要』80 愛知大学国際問題研究所 pp.83-101
- 池上貞一 (1985) 「長谷川雄太郎と広州同文館 (下)」『紀要』83 愛知大学国際問題研究所 pp.145-165
- 片桐ユズル (1996) 「GDM (段階的直接法)」鎌田修・川口義一・鈴木睦編著 (1996) 『日本語教授法ワークショップ』凡人社 pp.23-41
- 川瀬生郎 (1986) 「日本語教科書「日本語初歩」の作成とその問題点」『日本語教育』59号 日本語教育学会 pp.100-107
- さねとうけいしゅう (1960) 『中国人日本留学史』くろしお出版
- さねとうけいしゅう (1966) 「実藤文庫のいきさつ」東京都立日比谷図書館 (1966) 『東京都立日比谷図書館蔵実藤文庫目録』東京都立日比谷図書館 pp. ii - iii
- 谷口知子 (2011) 「伊澤修二の日本語教材『東語初階』・『東語真伝』」『関西大学東西学術研究所紀要』44 関西大学東西学術研究所 pp.341-355

- 吉岡英幸 (2000) 「明治期の日本語教材」 木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会 (2000) 『日本語教育史論考－木村宗男先生米寿記念論集－』 凡人社 pp.13-25
- 吉岡英幸 (2002) 「明治期の語法型教材」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 15 早稲田大学日本語研究教育センター pp.133-146
- 吉沢美穂 (1978) 「グレイデッド・ダイレクト・メソッド」 小川芳男他 (1978) 『現代の英語教育 3 英語教授法各論』 研究社出版 pp.68-84
- 吉沢美穂 (1986) 『絵を使った文型練習』 大修館書店
- 劉建雲 (2005) 『中国人の日本語学習史－清末の東文学堂－』 学術出版会

参考資料

(『日語入門』は本文 4 ページ表 1 に掲載してあるため省略)

- 鈴木忍・川瀬生郎 (1981) 『日本語初歩』 国際交流基金日本語国際センター
- 川瀬生郎・伊藤芳照・小出慶一・才田いずみ (1990) 『日本語中級 I』 国際交流基金日本語国際センター
- 川瀬生郎・富田隆行・藤井美智子 (1996) 『日本語中級 II』 国際交流基金日本語国際センター

なかむら しげほ (留学生センター准教授)

Introduction to the study of HASEGAWA Yûtarô: Based on the collation of different texts of “*NICHIGO-NYÛMON (Introduction to Japanese)*”

NAKAMURA, Shigeho

This paper aims to provide a bibliographical analysis and examination of the textbook “*NICHIGO-NYÛMON (Introduction to Japanese)*” written by HASEGAWA Yûtarô (1865–1904), a Japanese teacher during the Late Qing Dynasty. Six texts including the manuscript of this work were found in Japan. Collation of five of the texts resulted in 506 differences, mostly differences of indentation together with misprints, omitted letters, differences of punctuation marks and signs, side lines, ruby characters and so on. However, no changes in the sentences were found.

Examining the teaching points in the textbook from the viewpoint of a modern grammatical syllabus, it was found that structures based on particles are introduced at the beginning stage, followed by the presentation of functions or expressions related to these structures with a question and answer methodology. From these features, the textbook appears to be designed especially to build up conversation skills.

In addition, the author examined research by Liu who claimed to detect a relationship between Hasegawa's teaching method and the Graded Direct Method (GDM). However, the author concluded that it was difficult to find any such relationship with reference to the teaching points in GDM. Two structural features of the textbook appeared to involve the separate presentation of content words and structure words, and the intensive presentation of structure words.

Finally, as future research issues, searches for further versions of the textbook and much more bibliographical research are needed.